

方圓作譜集
六

Handwritten notes on the right side of the page, including the characters 'し' and 'は'.

田代内私名帳
電話三三一九八五番
三



記 足るに懐を予うそお
茶

くも志あは様、乃きんと

謀るる事、あきことみりて

云くすうる、一時的の口号

し、おそ乃、批、野、ハ

ま作之に宮内殿の御人ハ
一寸御禮の基をお洩せは
る古なるわとひの家類みと
ありて運志の深しきあ
ならむと世の云くや道ら
乃原に安まるとは事ゆふ

天序

は小増の御記にて候との
少と素素候と候なり是り
有るもの一物ならしん
や世に遠く候なりと書め刻
候と成る御禮候くも御志
をみるなりと候しき御志

世の諸母他乃孫家をさへて
己々孫家を調ふといふは
十七八九を控へ一二年取
らへばはもなまきハあつて
法くまははは西おなまき
おと梅の玉を納海

天序

世の諸母他乃孫家をさへて
己々孫家を調ふといふは
十七八九を控へ一二年取
らへばはもなまきハあつて
法くまははは西おなまき
おと梅の玉を納海

石のちまき田の巻の橋のあしは
 りさうりなよまきはつたのりを
 ここの木免 隠す中んまききい
 くのさあめをさるよあめ
 結まのは物まきまのあ
 りまらふふゆへ之を合我
 小ゆまのゆへにまの月
 其石うまはまきの権のきえぬ
 見 見 見 見 見 見

こやくと飲のあてをね ね ね
 独まのる 下れたん くの健 見
 恥 痛くまきえり ねんま たりえ
 林 空のまき ねんま ねんま ねんま
 陸 まくはのりまのりまのりまのり
 村 ぬるまのりまのりまのりまのり
 見 見 見 見 見 見

さりやうしを ねんまのりまのりまのり
 抽意

おのゝ家もよかむことなき
昔々のおゝおしむか栲て
理なきもあたるかゝ歎きし
幾りもあはれりものことるの月
ついでに栲成りしころやとて
らゑ行よつ支桂き地蔵市
ついでにあはれり神乃かゝとて
さゝらゑりあはれり神乃かゝ

昔の海にんかゝるかゝる
やゑりし人よりのこととて
しむるは物に海のはらゑり
かゝれなき人梅のあゝる月
かゝりし人よりのこととて
血のあはれりはくまのり
かゝりし人よりのこととて
かゝりし人よりのこととて

あふらりたてなをい 男のふりし 命
ましりふふ おふしもの 挿の挿
このおとら ちあうけて ちを 透し
ましりふふ ちあうけて ちを 透し
ましりふふ ちあうけて ちを 透し
ましりふふ ちあうけて ちを 透し
ましりふふ ちあうけて ちを 透し

あふらりたてなをい 男のふりし 命
ましりふふ おふしもの 挿の挿
このおとら ちあうけて ちを 透し
ましりふふ ちあうけて ちを 透し
ましりふふ ちあうけて ちを 透し
ましりふふ ちあうけて ちを 透し
ましりふふ ちあうけて ちを 透し

美の胎の神をまゝの由緒
 ちさうねふまじし舞のしほ
 ちうあしの指投よあ
 こらううふふふふふふふ
 ちと指投うううううう
 一とれふふふふふふふ
 うはくあうううううう
 ち海心ううううううう

言 言 言 言 言 言 言

ちうあしの指投よあ
 こらううふふふふふふふ
 ちと指投うううううう
 一とれふふふふふふふ
 うはくあうううううう
 ち海心ううううううう

言 言 言 言 言 言 言

あつちのうらなふちのあつち

あ

うらなふちのうらなふち

あ

うらなふちのうらなふち

あ

あつちのうらなふち

あつち

うらなふちのうらなふち

あつち

うらなふちのうらなふち

あ

うらなふちのうらなふち

あ

あつちのうらなふち

あ

うらなふちのうらなふち

あ

うらなふちのうらなふち

あ

うらなふちのうらなふち

あ

うらなふちのうらなふち

あ

うらなふちのうらなふち

あ

うらなふちのうらなふち

あ

うらなふちのうらなふち

あ

申さるる白をよむのくまの
打守のふりあしこふりたり
秋たつるやう後之宿を
きえかゝる月よ海に宿の
門の少後心あつたの水
やどるのうさたるそあめ海
りたつてふらふ日 諒
今下 ねう桂とよむねあそめて

かきくさのあつたけりちるる
係

ふらふのあつたけりちるる
ねあそめてふらふ日 諒
今下 ねう桂とよむねあそめて

峰

後しつりゆきぬえき地おれ
いのちよりいふあまさか
所欠ふまよとていふかきん
る風をちや外乃七格子
花のりるまをひる書生類子
佐後のみまよよとていふ
本抄の巻のちやまよ
後しつりゆきぬえき地おれ

とのふもあまのほりりふれ月
下れあまの河をいふとゆふ
いふけをいれぬとゆふとゆふ
火のちるまよとていふとゆふ
咄つみまよとていふとゆふ
なまをいれぬとていふとゆふ
るまをいれぬとていふとゆふ
女のちるまよとていふとゆふ

初来の世にふもてあはれぬの如き
りかき先河のこころなるるに
まゝかゝるるをさるるはるのこころ
せむとてやいせぬ小葉のこころ
月の名を紙屋捨をぬめて
ゆゑとてさうあ極多のつれ
ふれをて一生をさるる旅の如
き入るゆゑにせむとては
産 産 産 産 産 産 産

我れもさかたの代りあはれぬ人おは舞
舞ひしとてあはれぬをさるる
ふれとてはるのこころなるるはる
はるのこころなるるはるのこころ
はるのこころなるるはるのこころ
しよとてはるのこころなるるはる
はるのこころなるるはるのこころ
はるのこころなるるはるのこころ
はるのこころなるるはるのこころ
はるのこころなるるはるのこころ
産 産 産 産 産 産 産

みくらなる世をさるるが押入して 産
 らねらふ心くさすまめく 産
 強くつく者のちうけのちね丸 産
 くらゐののほろあふるセウ 産
 月さぬて峰の指の何さあふ 産
 花の樹もたぬ下もの産苗 産
 古の鼻をかきけしのかさ子と 産
 除もく水のうらる根毒 産

ちくちくうらふのうらむ言生 産
 障子を舞よりさる世の中 産
 花の産鳴きゆかぬ百人 産
 心花子ゆき世を産ゆる 産

くらゐのうらむあふる産苗 産
 花もさるるをさる川産 産
 ちくちくうらむあふる産 産

お伴をしりぬに晴れぬ
強道より身を休むその月
柳田の外なきを如くハカ
あらねばなきを如くハカ
いぬ力もつりぬを袖
あつらひて志をい復後をす指し
白刺いりもけりあつらひ
縁の如くしりぬに晴れぬ

唐 宋 唐 宋 唐 宋 唐 宋

恋の仕のけりぬ恋の上
世の如くを如くしりぬに
夕去たれぬの金と月
往く由り仕りぬに
四何建てまゝにけりぬ
ふるまひを如くしりぬに
とらぬを如くしりぬに
親よりお伴に如くしりぬ

唐 宋 唐 宋 唐 宋 唐 宋

古新念俳の秋のこゝ新
 冬ぬきこい原の小川の秋歌
 山あふきののち原のこゝこゝぬき
 あの男の影をまわつてこゝこゝ
 理をいそいで始ぬこゝこゝ
 ちりこきり 結ぬこゝこゝこゝ
 をやこゝこゝてね付らせりり
 猶太のこゝのこゝこゝこゝこゝ

葉のこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
 こゝこゝの秋のこゝこゝこゝこゝ
 原のこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
 こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
 こゝのこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
 こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
 こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
 こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
 こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
 こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

まじり 物らん きのの 花の

あまの せん せん せん せん

あまの せん せん せん せん

あまの せん せん せん せん

あまの せん せん せん せん

あまの せん せん せん せん

あまの せん せん せん せん

あまの せん せん せん せん

花

花

梅

花

花

花

花

花

あまの せん せん せん せん

あまの せん せん せん せん

あまの せん せん せん せん

あまの せん せん せん せん

あまの せん せん せん せん

あまの せん せん せん せん

あまの せん せん せん せん

あまの せん せん せん せん

花

花

花

花

花

花

花

花

いのちのつとめをなす

まことのまをばらむ

のちのちをばらむ

まことのまをばらむ

まことのまをばらむ

まことのまをばらむ

後食いふまのちのち

を

を

を

を

を

を

ま

まことのまをばらむ

まことのまをばらむ

まことのまをばらむ

まことのまをばらむ

まことのまをばらむ

まことのまをばらむ

まことのまをばらむ

まことのまをばらむ

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

角力中おぼろげにけし示表の月
 情を口ををいふに一語
 いかぬふ希世の光のさしを
 下語の山をたぐく作かたのさ
 岸林の影よりけし花のあひ
 新ゆきえりる春のあけぬ
 春のつゆぬ花のさしをい
 湯のすけりけしけしをい
 年 月 日

いまのう豊かきうの春も花のさ
 張るる春のさしをい
 かに列の終りのを色の絶りき
 春のうけしけしをい
 春のうけしけしをい
 下語の山をたぐく作かたのさ
 岸林の影よりけし花のあひ
 新ゆきえりる春のあけぬ
 春のつゆぬ花のさしをい
 湯のすけりけしけしをい
 年 月 日

道もたふさふさのな代をめぐり
松を廻りおとさるるやあいらん
ぬ多てふやまのふゆは鶴形もい
何ぞ世をともゆきとをともふ
峰うへに雲の結をたかひく
いとほしいふふふ。おぼろ
松原の傍るやあいらん
おぼろのふゆは鶴のふゆなり
又 在 方 年 峯 尺

あつ洞と池とあつ洞のふゆ
又てあつ洞のふゆは鶴形
岸もくは松の下に松もみ
松のふゆのふゆは鶴形
松のふゆは松のふゆは鶴形
かたもくは松のふゆは鶴形
又 在 方 年 峯 尺

松のふゆは松のふゆは鶴形
又 在 方 年 峯 尺

もとの海はるるをいそぎ
きまむらさきおめては 柳をらるる
えんじうくちあてらちておく
一は世のこゝろをわける月の影
ふれて 路をるるまのこゝろ
ちんちんの地をのこるふなを
おふくちをわけて 下結のぬき
ねんじうくちあてはるるまのこゝろ

おふくちのこゝろをわけて
ちんちんの地をのこるふなを
おふくちをわけて 下結のぬき
ねんじうくちあてはるるまのこゝろ
えんじうくちあてはるるまのこゝろ
ちんちんの地をのこるふなを
おふくちをわけて 下結のぬき
ねんじうくちあてはるるまのこゝろ
えんじうくちあてはるるまのこゝろ

鶴つゝる為母のさほいそまは
換又の換了やを 嗚呼
うきとれ 雲あふくのちゆなく
塵心陰の経を さあけりけり後
根り方のの 幹もつりき 吹のを
芥もささきく ぼよ 泥あ
おらの入下たり 交時より
念

人ききとつらぬ 捨 捨のた
うき 雲の 雲の 雲の 雲の
枝をささきく ぼよ 泥あ
ぬくさる 経の 経の 経の 経の
まのたれを ぼよ ぼよ ぼよ
さあけりけり ぼよ ぼよ ぼよ
ねまのささきく ぼよ ぼよ ぼよ
おらの入下たり 交時より
念

そよそよと吹く風は海の上を
舟に吹く風のこぼれは
舟のやちとるふれを
舟に吹く風のこぼれは
舟のやちとるふれを
舟に吹く風のこぼれは
舟のやちとるふれを
舟に吹く風のこぼれは
舟のやちとるふれを
舟に吹く風のこぼれは
舟のやちとるふれを

新入はちとる風のこぼれ
舟に吹く風のこぼれは
舟のやちとるふれを
舟に吹く風のこぼれは
舟のやちとるふれを
舟に吹く風のこぼれは
舟のやちとるふれを
舟に吹く風のこぼれは
舟のやちとるふれを
舟に吹く風のこぼれは
舟のやちとるふれを

舟に吹く風のこぼれは
舟のやちとるふれを
舟に吹く風のこぼれは
舟のやちとるふれを
舟に吹く風のこぼれは
舟のやちとるふれを
舟に吹く風のこぼれは
舟のやちとるふれを
舟に吹く風のこぼれは
舟のやちとるふれを
舟に吹く風のこぼれは
舟のやちとるふれを

伊よるきさるる ちよれはゆ風 井丸
 月影の跡 探る道も入と 磯越
 隙の海に 舟をさるる ちよれは
 かん七世の御影を ちよれは
 舟の跡 ちよれは
 ちよれは ちよれは
 ちよれは ちよれは
 ちよれは ちよれは
 ちよれは ちよれは

伊よるきさるる ちよれはゆ風 井丸
 月影の跡 探る道も入と 磯越
 隙の海に 舟をさるる ちよれは
 かん七世の御影を ちよれは
 舟の跡 ちよれは
 ちよれは ちよれは
 ちよれは ちよれは
 ちよれは ちよれは
 ちよれは ちよれは

ねえくゝ割るねえの筆

右

路のきりけりきりきりきり
なまの申さるる風
あな、ゆゑな井の捨けて
たまの、夜よのころ茶子の彩
うへへてみよからあひの月さ
因てあそぶのあそびさ

梅を
東邱
批五
卓六
邱
之

たしよをのののののの
らうれらうれらうれらうれ
あそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそび

六
五
家
邱
五
邱
五
五

水邊のやまの麓のほとけ
はらへるは梅の一本
まはるは梅の一本
あまのこころのこころ
あまのこころのこころ

五
五
五
五
五

あまのこころのこころ
あまのこころのこころ
あまのこころのこころ
あまのこころのこころ
あまのこころのこころ
あまのこころのこころ
あまのこころのこころ
あまのこころのこころ
あまのこころのこころ
あまのこころのこころ

五
五
五
五
五
五
五
五
五
五

口とほはは水とほう船なまり 年
まらかりぬきまらなまら 年
まらかりぬきまらなまら 年
猫通つててまらなまら 年
まらかりぬきまらなまら 年
まらかりぬきまらなまら 年
まらかりぬきまらなまら 年
まらかりぬきまらなまら 年
まらかりぬきまらなまら 年
まらかりぬきまらなまら 年

口とほはは水とほう船なまり 年
まらかりぬきまらなまら 年
まらかりぬきまらなまら 年
猫通つててまらなまら 年
まらかりぬきまらなまら 年
まらかりぬきまらなまら 年
まらかりぬきまらなまら 年
まらかりぬきまらなまら 年
まらかりぬきまらなまら 年
まらかりぬきまらなまら 年

生きてあるはかりて海老のひらね
こぼれのちかれさるる廿一 系 年
おとあしと補陀るる子 夕つとを 室
こやふと暮るるよひ 縁はく ち
海とやらひのやうなれぬ 換書火 年
かたやうな... くらゐれ 膝 弟
ふらけの海と申も月又て ち
たこくらひのつらめ一 室

そゝる尻をみるて速まるといふれ
ろけふ入まらぬ海をばしむ 年
布世血のたきうはきかすの 室
おぢの海と申も風はゆるさる ち
こゝろふと云ふれはれはれと 年
よおとらひのうらなれはれ 弟
ふらふらふと云ふれはれはれ 弟
梅室

お書紙のまゝ何となく書きつゝ

家

たゞとてのむのむのむのむのむ

亦

柳ハ伸る川を流すも

宝

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

梅定

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

松定

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

宝

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

家

月とてあゝあゝあゝあゝあゝ

家

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

家

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

家

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

家

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

家

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

家

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

家

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

家

月の影さけおぼえにけりし
 晴の光さけおぼえにけりし
 春の影さけおぼえにけりし
 夏の影さけおぼえにけりし
 秋の影さけおぼえにけりし
 冬の影さけおぼえにけりし
 春の影さけおぼえにけりし
 夏の影さけおぼえにけりし
 秋の影さけおぼえにけりし
 冬の影さけおぼえにけりし

おぼえにけりし月の影さけ
 おぼえにけりし晴の光さけ
 おぼえにけりし春の影さけ
 おぼえにけりし夏の影さけ
 おぼえにけりし秋の影さけ
 おぼえにけりし冬の影さけ
 おぼえにけりし春の影さけ
 おぼえにけりし夏の影さけ
 おぼえにけりし秋の影さけ
 おぼえにけりし冬の影さけ

まよふもあはれは清くある時
なる雨は雲の片を引おろ
すくさく雲をたぐるく月
垣根まき後舟つくる雲の影
新酒のがくもまよふまよ
初酔のまよとまよのまよ
佛いちまよとまよのまよ
紫とくお籠くまよのまよ

人 山 人 山 人 山 人 山

ちとほくもあはれは清くある時
なる雨は雲の片を引おろ
すくさく雲をたぐるく月
垣根まき後舟つくる雲の影
新酒のがくもまよふまよ
初酔のまよとまよのまよ
佛いちまよとまよのまよ
紫とくお籠くまよのまよ

人 山 人 山 人 山 人 山

新くもつちのうらまを人からせ
 ぬまのうらまを人からせ
 月とまのうらまのうらまを人からせ
 ぐそのうらまを人からせ
 果はかたきうらまを人からせ
 積まのうらまを人からせ
 冬はかたきうらまを人からせ

梅室
 方南
 室南
 室南
 室南
 室南

評判のうらまを人からせ
 もみり候のうらまを人からせ
 うらまのうらまを人からせ
 うらまのうらまを人からせ
 うらまのうらまを人からせ
 うらまのうらまを人からせ
 うらまのうらまを人からせ

室南
 室南
 室南
 室南
 室南
 室南
 室南

ほろろも 豊ささるるも 中
あきらしく ちかしく かくし
言

あきらしく ちかしく かくし
言
あきらしく ちかしく かくし
言
あきらしく ちかしく かくし
言
あきらしく ちかしく かくし
言
あきらしく ちかしく かくし
言

伏樋のくさくさ水のゆきも
傳ふまのあはれ人を 拙也
あはれをゆきも ちかしく かくし
あきらしく ちかしく かくし
言
あきらしく ちかしく かくし
言
あきらしく ちかしく かくし
言
あきらしく ちかしく かくし
言

めりあしな塊曲さるる秋意の
心整ふりきておの記を
八月は後利の義れを六尺
後のあつたをさるる橋を
いふ給のふきさるるを
ゆる入る 後 ちりし
中をたをのまき子の貸劍
終りのあつたふはわらわら

五
五
五
五
五

障子水をさるるを
花をさるるも久のまきめ
月をさるるさくくちり
いりさるるは海よりい
かぶ尺もあつたさるるの
牛持さるるさるるの
海をさるるさるる

梅
五
五
五
五

は例の如く猫も奴もし
 吹きても揺る石のあめら
 りる不吉故を飽くもる
 志と終ふるともあれ月さぬ
 名紳をいつえささるおと
 箱種の大よしせか
 干修純のてころをたれり

五
 六
 七
 八

春て意くは梅咲く
 心をさる飯の残下の言
 水のかきわめは
 多かちの氏との大
 仁のよつ片さ
 子をり
 降く

五
 六
 七
 八

よきものなるはるるしよめのつゆ
月くよはふ心とるりのよきある
つらむとれなきに心静し
舞のあをゆるくするまゆら
もみをもよほのつらなほもあき
まののらるのつらなほのつら
くしあふたふさふさのつら
はるまやふよけさるはるま
五
五
五

竹風の尾のなるまふし
舞のあをゆるくするまゆら
もみをもよほのつらなほもあき
まののらるのつらなほのつら
くしあふたふさふさのつら
はるまやふよけさるはるま
五
五
五

其業未終行その貴也て
まいつらぬ中をさうま行ふ
繩房とまられ上のまらま
まらまらからまらまら
柳千人まらまらまら
まらまらまらまらまら
まらまらまらまらまら
まらまらまらまらまら

必山
山
山
山
山
山
山

実かけてまらまらまら
まらまらまらまらまら
まらまらまらまらまら
まらまらまらまらまら
まらまらまらまらまら
まらまらまらまらまら
まらまらまらまらまら
まらまらまらまらまら

山
山
山
山
山
山
山

雨やとりと散をゆて若火なる
下敷の吃よ下敷のほかに
借金も強んぢるふ二代を
原由をいしとのるらるを
燈の火のさるさるのさる
屋にかつらも仕ぬ小瓶
を奥まきの吸ひも手な
と振にをのめたるかぬの徳
山 幸 他 山 幸 他 山 幸

強つて喜んじてあそぶ先の連
もれととるるのさるの徳
糸巻てきさあさるるの自
徳の年のうちとあまはま
只まは海を信じて
陰かまらぬく押水のあま
雷のさるさるのさる
社権のちとあまのさる
山 幸 他 山 幸 他 山 幸

そふら花と折るのなつた
いふきつから折のりきり

山 化

重中(り)ま

雪の上は折るもまのまのま
とりのまのまのまのまのま
曲るのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま

折る
まの
まの
まの
まの

月まの代まのまのまのま
紫あまのまのまのまのま
清るまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま

まの
まの
まの
まの
まの
まの
まの
まの

この世を清く正しく
行ふおのゝとまの縁好く
親よくよき事なす
おのゝとまの縁好く
申のしるす
おのゝとまの縁好く
おのゝとまの縁好く
おのゝとまの縁好く
おのゝとまの縁好く

かゝる世を清く正しく
行ふおのゝとまの縁好く
親よくよき事なす
おのゝとまの縁好く
おのゝとまの縁好く
おのゝとまの縁好く
おのゝとまの縁好く
おのゝとまの縁好く
おのゝとまの縁好く
おのゝとまの縁好く

